

派遣者番号	30K12	氏名	齊藤 慎一
研究主題 —副主題—	体育学習（ゲーム領域）における社会性の育成に関する一考察 —社会性とゲーム観の関係に着目して—		
派遣先	東京学芸大学教職大学院	担当教官	浅野 あい子
所属校	杉並区立馬橋小学校	校長	森 孝

キーワード：体育 ゲーム領域 社会性 ゲーム観 技能差

1 研究の背景（目的）・主題設定の理由等

児童の社会性の問題が深刻になる中で、体育は社会性の育成を期待できる教科であると言われる。しかし、実際の指導ではゲームを進めることを優先させたいがために、友達への言い方や関わり方を一方的に指導するなど、その場を収めるだけの対症療法的な指導に陥っているのではないかと。また、体育における社会性の育成のための授業研究はあまりされておらず、成果が十分に蓄積されているとは言えないという指摘もある。技能向上や戦術をいかに理解させるかといった研究が多い中で、社会性の育成という視点は、一人一人の児童の心情を推し量る難しさや体育学習だけではない要因が複雑に絡み合うという条件下で敬遠されてきたのではないだろうか。

そこで本研究では社会性を「他者理解の意識（以下、他者理解）」や「共感的に理解しようとする意識（以下、共感的態度）」、「自己主張や自己抑制の意識（以下、自己調整）」の三つの側面から捉えることとし、これら三点を社会性を分析するための視点とした。

さらに、これらの意識の変容過程を勝部ら（1981）の「スポーツにおけるパーソナリティの社会的変容過程」を基に捉えることとした。これによると外からの刺激に対してその児童なりの解釈を行い、判断し、行動を起こす中で他者から受容／拒否される過程を経て社会性の意識が変容されることが分かった。私はこの解釈の段階に「ゲーム観の違い」という情報を取り入れることで三つの社会性の意識がより効果的に向上するのではないかと考えた。「ゲーム観」とはゲームに対する各人の価値観であり、ゲーム観が異なるとは、得点を取って勝つことが大事だと考える児童やみんなで協力して楽しむことが大事だと考える児童など、ゲームを行う意味（価値）が児童によって異なるという意味である。

ゲーム観の違いがあることを児童が情報として知ること、自分のやりたいことと友達がやりたいこととの間で葛藤が起き、それによって他者の気持ちを考えようとするなど社会性の意識が変容するのではないかと考えた。

以上のことから、本研究の目的を「ゲーム領域において、児童の社会性がどのような過程で育成されるのかを明らかにすること」とした。そして、研究仮説を「互いのゲーム観の違いを認識し共有することによって、自分のゲーム観が広がり、社会性に関する意識の向上へとつながるのではないかと」した。

2 研究の内容・研究の方法

(1) 対象：都内小学校4年生児童（23名）

(2) 教材：ゴール型 ハンドボール

(3) 単元指導計画の工夫：

ゲーム観の違いを認識し共有するため1、2時間目終了後すぐに学級活動の時間を設定し話し合わせる。

(4) 検証方法：

クラス全体の意識調査を行い、その変容を調査する。その後、変容があった項目に限定し、どのような要因によって変容したのか、抽出した調査児童3名の行動調査から明らかにする。

【意識調査】

単元初期、中期、終期の3回実施した。「他者理解」「共感的態度」「自己調整」の三つの側面について各4項目（1～4点）で平均点を算出する。

【行動調査】

- ①抽出した児童A,B,Cの3人（2チーム）の行動変容をフィールドワークから見る。
- ②インタビューによる意識の変容を見る（抽出した児童、該当チームメイト、担任）。
- ③児童の感想文を観点別に分類しその傾向を見る。

3 研究の結果

クラス全体で「他者理解」「自己調整」の意識に単元前後で有意な差が見られたが「共感的態度」に関しては有意な差は見られなかった。自分とは異なる他者の意見を共感的に受け止めることは小学生の発達段階では時間がかかると考えられる。

「他者理解」と「自己調整」の意識が向上した要因をゲーム観から探るため、3人の抽出した児童の変容を見ることとした。

Aさんは、単元初期は「ボール操作が上手な人たちだけで得点を入れて勝てればよい。」と考え、ボールに触れられない友達の存在は気にしていなかった。しかし、ゲーム観の違いを1時間目の後に話し合うことで、チームのメンバーが、勝つことだけでなくみんなで楽しむことを望んでいることを知った。また、友達が望む理想のキャプテン像も認識した。ゲーム観の違いを共有し認識することで、Aさんは友達の願いを受け入れ（他者理解）、チーム全体の技能の向上というキャプテンの視点で友達と関わられるようになった（自己調整）。

BさんとCさんは各メンバーのゲーム観の違いは認識していたが、「女子にパスをしたらミスをして勝てない。しかも、女子の技能はすぐに向上しない。」という葛藤を二人とも抱いていた。そんな中、Bさんは女子が懸命に動こうとしている姿を目の当たりにする。これをきっかけに「ボール操作が上手な男子だけで勝てればよい。」という自己のゲーム観と「パスを回してもらい得点したい。」という女子のゲーム観との間で揺れ動き始めた。そして女子の技能向上に目を向けるようになるが、短時間で技能を高めることは難しく、試合で勝つことに直結しないことから、葛藤からなかなか抜け出せずにいた。

単元中期、BさんはCさんと意見が衝突したことにより、互いのゲーム観を改めて認識し、「どうすれば女子のパスが成功するか。」というチームの課題が明確になった。このように、児童同士の衝突によって互いのゲーム観やその変化に気付くことができ、自他の願いをかなえるためには女子の技能向上を図る必要があるという課題に向き合えるようになったのである。

一方、Cさんは、これまでのツーマンプレーという考えから、女子の技能に合わせるといった方向に舵を切った。作戦をシンプ

にしたり、捕りやすいパスを回したりするなど、自分がやりたいことを全面に出すのではなく相手に合わせようと考えた。「練習では近くで易しいパスなら（女子は）捕れていたから。」という単元終期の発言は、他者理解の意識の高まりの表れであり、自己調整に目が向けられたものと考えられる。

4 研究の考察

自己と友達のゲーム観との違いを情報としてもつことで、児童は、友達のゲーム観を含めた視点でゲームを見ることができるようになる。それがきっかけで、自他の願いや技能差を考慮した葛藤が起き、互いの願いをかなえるための方法は何かと考えるようになる。このような過程を経て、自己のゲーム観が広がっていく。検証の結果、ゲーム領域の学習において、児童は自他のゲーム観の違いを共有し認識することにより社会性に関する他者理解と自己調整の意識が高まっていくことが明らかになった。

また、ゲーム観が広がっていく過程において、社会性の高まりと個々の技能差とは切り離せないことが分かった。児童が、技能差を互いの違いの一つとして受け入れ、個々の課題ではなく集団の課題として捉えたり、一人一人の技能をゲームにどのように生かせばよいかを考えたりすることができることが明らかになった。技能面も含めて互いを認め、他者の思いを大切にしながらゲームを楽しむために何ができるかを探究しようとする態度は、体育の指導を通して育む資質・能力の一つに他ならない。このような指導こそが、技能差という課題を乗り越え、みんなで運動を楽しもうとするスポーツの主体者を育てることにつながると考える。

5 今後の展望

本研究で明らかになったゲーム観の共有の有効性をカリキュラムにどのように位置づけるのかを明確にし、各学校へ広める。

また、体育は技能向上や戦術理解だけでなく、技能差という問題をどう捉えるかといったスポーツの多面的な見方を育てることができる。技能差はネガティブなものではなく、互いの違いを知り、互いの願いを実現するための価値ある問いであり、そこに社会性向上が期待できることを広める。

(参考文献)

勝部篤美、炎野豊(1981)『コーチのためのスポーツ人間学』大修館書店